

資本の前段階としての位置づけを獲得した。しかし積極的に、工業化をすすめてゆく道筋を中國近代史の中に発見するの
に、氏がどういふ方法とプランでやるつもりなのか？その行
手が全く鎖されているという感じをぬぐうことはできない。

(東京都立大學助教授)

ジョン・アンドリニュー・ボイル博士譯

「ジュヴァイニーの

世界征服者の歴史」

本 田 實 信

The History of the World-Conqueror by 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik Juvaini. Translated from the text of Mirza Muhammad Qazvini by John Andrew Boyle. 2 vols., Manchester University Press, Manchester, 1958. xlv+763 pp., 3 maps.

最近に於けるモンゴル史、チムール朝史の研究は思ひの外に活潑であつて、重要な關係史料が續々刊行され、譯出されてゐる。⁽¹⁾ペルシア文史料に就いては、ラシード・ウッディ

ンの「集史」だけを見ても、諸部分のテキスト・翻譯の刊行が相接ぎ、その他モンゴル時代史、チムール朝の稀覯史料が容易に見られるやうになつた。ここにまたマンチェスター大學ペルシア研究室主任のボイル博士による「ジュヴァイニーの世界征服者の歴史(Tarikh-i-Jahan-Gushay-i-Juvayni)」の英譯が刊行され、モンゴル支配時代の中央アジア、イランの研究に寄與する所大である。

原著者アラール・ウッディーン・アター・マリク・ジュヴァイニーはイラン東北のホラサン州ジュヴァイン地方の名家の出である。その祖はセルジューク、ホラズム・シャー兩王朝に仕へ、代々 *sahib-divan* (財務長官) に任ぜられ、この稱號はジュヴァイニー家の異名のやうになつた。父バハー・ウッディーンはモンゴル人に仕へて *sahib-divan* に任ぜられた。ジュヴァイニーは一二三六年に生れ、二十歳前に出仕し、第三代のペルシア總督アルグンに隨行して、カラコルムの宮廷に少くとも二度赴いてゐる。その後フラグのイスマイル派殲滅戰に従ひ、バグダード攻略後、バグダード長官に任命されて二十餘年間銳意復興政策を進めたが、晩年政敵に陥れられ、兄弟の宰相シャムス・ウッディーンの没落に先立つて一
二八三年亡くなつた。ジュヴァイニーが友人に勧められて世界征服者即ちチングス・カンの歴史の筆を起したのはヘジラ

曆六五〇年(1952年)モンケ・カガンの宮廷に滞在在中のことであつた。その後政務の餘暇に執筆を続け、一二六〇年バグダード長官に任命された頃擲筆した。

「ジュヴァイニー史」は三巻に分れ、第一巻でチンギス・カンの勃興事情、その法令、ウイグルの歴史と傳承、チンギス・カンのホラズム・シャー王國の征服、太宗オゴタイから定宗グユクに至る時代、ジュチ・カン家、バツの西征、チャガタイ・カン家に就いて述べられ、第二巻はホラズム・シャー王國の創建から滅亡に至るまでを取扱ひ、カラ・キタイ及び四人のモンゴルのペルシア總督のこゝを含み、第三巻では憲宗モンケの即位事情、フラグの西征、イスマイル派暗殺團の歴史を取扱ひ、アラムートの主ルクン・ウツディーンの最期を以つて結んでゐる。

ドーソンがその「モンゴル人の歴史」の中で「ジュヴァイニー史」を始めて利用してから、部分的な原文の刊行・譯註がなされてきたが、「ジュヴァイニー史」の史料價值を認識し、これに批判的研究を加へたのはロシアの碩學V・V・バルトリドである。一方E・G・ブラウンは「ペルシア文學史」を書き續け第三卷「韃靼支配時代」の準備中に、モンゴル時代のペルシア文の歴史作品の價值と重要性を知り、「集史」と「ジュヴァイニー史」との原文刊行を思ひ立つた。「ジュ

ヴァイニー史」刊行の計畫は彼の友人であつたペルシア人ミルザ・ムハンマッド・カズヴィーニーに委託された。一九〇六年のことである。カズヴィーニーはパリの國民圖書館所藏の「ジュヴァイニー史」の寫本六本に就いて校合し、一九一二年、すぐれた序論を附して第一卷の原文を公にした。一九一六年第二卷を出したが、更に七寫本を校合して第三卷を出したのは一九三七年のことである。全三冊はギブ記念叢書の第一六集を成す。テキストの校訂は頗る嚴密である。

ボイル博士の譯業は表題に記してあるやうに、このカズヴィーニーの校訂本に據る。英譯書の内容を見ると、上・下二冊で、ステイーヴン・ランシマン卿の序文、謝辭、譯者の序論、轉寫に就いての注意、書目、略符號に續いて、本文三卷の英譯を註をつけて收め、更に細密畫のオゴタイ即位圖の寫眞、蒙古・トルキスタン・イランの地圖三葉、モンゴル王室の系圖、索引を附して利用者の便を圖つてゐる。譯者の序論(KXXXX)は原著者ジュヴァイニー、その作品、彼の思想の三項に就いての要を盡した説明であり、「ジュヴァイニー史」が推敲不充分で、未完の作品であることを明かにし(KXXVI)、更に「ペルシアが長い苦難の時代を切抜けてよく生残り得たのは、〔ジュヴァイニーの父〕バハー・ウツディーンの如き爲政者に負うてゐる。王朝は勃興し、滅亡するであらう。然

し常に新政權に協力することによつて、國體の一種の持續性を保ち、それが全き破滅・崩壞に陥ることのないやうにした官吏達がゐた」(VM)と述べ、また「一方にモンゴル人の殘虐行爲のありのままの敘述、學問の衰滅への悲嘆、征服者に對する薄いヴェールをかけた批判とその敗北した相手に對するあからさまな讚美、他方にモンゴルの制度とモンゴルの支配者に對する稱揚、侵略行爲の神の思籠としての正當化、これらの表面上の矛盾を如何にして調和させるべきか」と問ひ(Xxiv)、ジュヴァニーの心情追求にまで筆を進めてゐる。

本文の英譯は一言にして云へば、あのやうに難解な「ジュヴァイニー史」をよくもこのやうな読み易い文章に移されたことと感嘆の他ない。然も頗る正確な譯文である。イスラム教徒として當時の最高の教養を身につけてゐたジュヴァイニーの文章は一語一句吟味され、コーランは勿論、豊富なアラビア文・ペルシア文詩句によつて鏤められてゐる。語呂合、字形合、詩句の脚韻の如きは、原文に就いて鑑賞する以外に術はなく、譯者が「翻譯ではどうしても多くのものが失はれる」(xxviii)と云ふのは誠に謙虚な言である。

譯者は一九三八年ベルリン大學留學中、故H・H・シェーダー教授の演習に出席して、始めて「ジュヴァイニー史」の存在を知り、ロンドン大學に提出したPhD論文にその第一卷

の譯を附したと云ふから、本書は譯者の二十年拮据努力の成果である。そればかりではない。ボイル博士は譯の成る毎に一、二章づつまとめて師のウラジミール・ミノルスキー教授のもとに送つて添削を乞はれた。後には正式にユネスコの要請でミノルスキー教授が最終譯稿を監修された。周到な注意を以つて譯文の正確が期せられてゐる所以である。

本文に對して相當詳しい脚註をつけ、難句、語呂合、故事等を説明し、引用詩句の出典(主としてカズヴィーニーに據る)、コーランの章節、シャーナーメの頁(Vullers版)を示してゐる。特殊・重要な語句は、本文でその譯語の後に原語の轉寫を括弧に入れて示し、特にモンゴル語、トルコ語の術語はその原語轉寫のままにして譯さず、脚註でその意味を吟味してゐる。更に固有名詞の読み方決定は慎重を極め、特にモンゴル語、トルコ語の地名・人名に對しては、他の根本史料である集史、元朝秘史、親征錄、元史は勿論、カルピニ、ルブック、マルコ・ポーロの記事と比較し、バルトリド、Jマルカルト、P・ベリオ、E・ヘーニシユ、F・W・クリーヴス等々のすぐれた研究に基づいて、その読み方を定め、その比定を試み、語原まで吟味してゐる。就中、(VM)を以つて示されてゐる地名比定の註はミノルスキー教授の教示によるもので、本書の價値を一層高くしてゐる。また脚註の隨

處でジュヴァイニーの利用したと思はれる史料に就いても言及してゐる。

かくして簡明、平易な英文で綴られた本譯書は正確であり、我々が安心して利用できるものと云へよう。そのことは舊來の部分譯と比べてみれば自ら明白であり、こと譯文に關する限り、從來のものは無用になつたと云へる。唯脚註に就いて若干氣付いたことを記してみよう。

35頁註2「キヤト部はボルジギンといふモンゴル部族の一分族である」と言ふが、必ずしもさうとは斷定できぬ。「集史」「蒙古源流」によつて考へればむしろその逆ではなからうか。なほ山口修氏「キヤンとボルヂギン」東洋文化研究所紀要、二、二四五—二八六頁參着。

35頁註9 *Qongiyat* がケレイト部の一分族の名稱とされてゐる。これはヘタグーロフ露譯の *FOHKAMI* に從つたものであらうが、正しくはヘレンシン刊本 (VII, 122) によつて *Tunkāyt Karāyt* とあるべきであらう。「秘史」(V, 94, 4, etc.) の董合亦惕に他ならぬ。なほ *Qongiyat* 部は「集史」によれば、モンゴル・ニルン族の一ツブ (*Khetagurov*, 197) チンギス・カンの十三翼の第十二翼を形成し (*Smirnova*, 88)、親征録 (國學文庫本、一八頁) の洪吉牙部に當る。

39頁註16・91頁註2「秘史」(X, 27a, 1) の帖卜騰格哩の名

前掲闊出が *Kökchü* と寫されてゐる。これは R・グルセーに從はれたのかもしれぬが、やはりモンゴル風に *Kökchü* と寫さるべきであらう。

41頁註6 ナイマン部の系統に就いては、最近村山七郎氏の論文が發表された。'Sind die Naiman Türken oder Mongolen?' von S. Murayama, *Central Asiatic Journal*, IV (1959), 188—198.

54頁註4 故安部健夫教授はブク・ハンをウイグルの懐信可汗であるとされた。「西ウイグル國史の研究」一七二—一九八頁。

58頁註21 從來ニラサグンの別名は *Gobaligh* (*Barthold*, *Turkestan*, 402) として知られてきた。故安部教授はその本來の讀み方が *Ghuzbaligh* であることを考證されたが (前掲書、四〇九—四一六頁)、ボイル博士はカスウィーニーのテキストの *QRBALY* を正して *Quzbaligh* と讀まれた。なほミノルスキー教授は、ハルトリートの「セミレチエ史」英譯に於いて、本文の *Gobaligh* に對し、索引ではその他に *Quz-baligh* を見出語とせよといふ (Four studies on the history of Central Asia, I, Leiden, 1956, 110)。

112頁註8 ブルハーン家に就いては次の論考がある。'Al-i-Burhan' von O. Pritsak, *Der Islam*, XXX, 1, 81—96.

118 頁註 9 Talagan に就いては岩村忍教授の「塔里寒考」東洋史研究(第十五卷第一號、二六一—四二頁)があるが、「塔里寒」はクンドズ東方の Talikan ではなく、バルフとメルヴ・アル・ルードとの間にあつた Talgan であらう。

235 頁註 66 なほオゴタイ括女の話は、「秘史」では「オッチギシの部衆の女どものこと」とし、「元史」では「左翼諸部の民女」のこととしてゐる。那珂通世「成吉思實錄」昭和十八年版、五七九—五八〇頁參着。

269 頁註 3 Bichek が憲宗モンケの異母兄弟であることは、「元史」一一七 牙忽都傳に「撥綽睿宗庶子也。撥綽之母。曰馬一實。乃馬眞氏」とあるによつて更に確められる。

574 頁註 74・75 譯註者は Keshik の所屬部 Qanqli 'bone は同名のモンゴルの一部族を指したものと説くが、如何なる根據に基くものか。既にチンギス・カン時代よりカンクリ人の降つて仕へる者の多かつたことは、「元史」等から知られる明日な事實である。更に「元史」一三四 幹羅思傳に「幹羅思康里民。曾祖哈失伯要。國初歿附。爲莊聖太后宮牧官」とある哈失伯要の哈失は、「ジュヴァイニー史」に KŠK と寫される名と同一であるとすれば、「集史」に云ふ Keshik の所屬部カンクリ「骨」は、やはりトルコ種のカンクリ(康鄰、康里)とすべきであらう。

モンゴル時代のペルシア語文獻には、多數のモンゴル語・トルコ語の術語を含み、言語學的研究の好材料であるばかりでなく、モンゴルの固有制度の解明に重要な手掛りであつて、総合的な研究が切望されてゐる。「ジュヴァイニー史」にも多くのかかる術語が含まれてゐることは、本書の索引を一見ただけで分る。前述の如くボイル博士はそれらの語に就いて註を施し、その意味を考察されてをり、今後の研究に資する所は大であらう。⁽⁸⁾

本書はドーソンに始まる「ジュヴァイニー史」翻譯の決定版と言へよう。本書の出版によつて他の根本史料との比較研究は著しく容易にされた。⁽⁹⁾ イラン社會の構造、モンゴルの制度のより徹底的な研究が本書の出現を機に期待されねばならぬ。

なほボイル博士は一般讀者を念頭に置いて譯を進められ、ランジマン卿はその序文で、本書は、モンゴル擴大の歴史やイスマイル派暗殺團の専門研究者のみならず、讀史を樂しむすべての人によつて讀まらるべき作品だと言ふ。本書がユネスコとテヘラン大學との提携によるペルシア作品の英譯第一集である所以である。

註

(1) 例へば「明代滿蒙史料」, Scripta Mongolica があり、

Göttinger Asiatische Forschungen 中の中心と關係の
ゆゑである。

(2) 「集史」の新編と翻譯はよく知られているが、この三冊を
題して出た(1946-52)『モロッコ紀行』(成業)チムーン紀行を合
む第二巻は大分前から出版準備中と聞く。この巻が出れば「モ
ロッコ史論」は完結されることになる。その他最近に於ける原
文の刊行を擧げれば次の如くである。

(i) Geschichte der Iḥāne Abgāga bis Gaiḥātū (1295—
1295) The Hague, 1957. (中絶)

(ii) Tārīkh-i-Ītimāʾī Dūra-yi Muḡhūl, ed. by Amir
Ḥusayn Jahānbiglū, Isfahān, 1336. (本文と注本を三冊)

(iii) Sultan Mahmud ve devrinin tarihi, ed. by
Ahmed Ateş, Ankara, 1957. (オスマンのスルタン・ムハンマド
二世史)

(iv) Tārīkh-i-Firqa-yi Raḥīqan va Ismaʿīlīyān-i Aīā-
mūt, ed. by Muḥammad Dabir Siyaqī, Tehran, 1958 (ム
ハンマド二世の歴史)

(v) Histoire des Francs, ed. & tr. par K. Jahn,
Leiden, 1952. (トルコ史)

これらブラグからガサンに至るイル・カン國史の原文と翻譯
(A. K. Arends) をムックで刊行された (cf. C. A. Storey,
Persian literature, II, 1, p. xi)°。K・ヤーン氏は「トルコ
史」の語を刊行準備中であると云々。

(3) 中心と時代を關係のゆゑに次の如く。

(i) Tabaqāt-i Naṣīrī, ed. by 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī
Qandahari, 2 vols., Lahore, 1949/50-53.

(ii) The geographical part of the Nuzhat al-Qulūb,
ed. by Mohammad Dabir Syaghi, Tehran, 1958.

(iii) Tārīkh-i Shāikh Uways, by J. B. van Loon, The
Hague, 1954

(iv) Die Resalā-ye Falakiyyā, hrsg. von W. Hinz.
Wiesbaden, 1952.

(v) Die Seltenschkengeschichte des Ibn Bībī, von H.
W. Duda, Kopenhagen, 1959.

モータール翻譯の出版のゆゑに擧げられた次の如く。

(vi) Zafarnāma par Nizāmuddin Šāmī, ed. par F,
Tauer, 2 vols., Praha, 1937—56.

(vii) Zafar-nāma of Sharaf al-Din 'Alī Yazdī, ed. by
Muḥammad 'Abbāsī, 2 vols., Tehran, 1336.

(viii) Šams al-Ḥusn von Tāğ as-Salmānī, hrsg. von
H. R. Roemer, Wiesbaden, 1956.

(ix) Extraits du Muntakhab al-Tavarīkh-i Murīnī,
publ. par J. Aubin. Tehran, 1957.

(x) Matériaux pour la biographie de Shah Ni'matullah
Wali Kermani, publ. par J. Aubin, Tehran-Paris, 1956.

(xi) Maḥā'i Sa'dāyān of 'Abd al-Razāq Samarqandī,

229—231.

ed. by Muḥammad Shaḥī, 2 vols., Lahore, 1360—68.
(xii) *Tārīkh-i Ḥabīb al-Siyar of Khwāndamīr*, 4 vols. Tehran, 1333.

(6) ナイル博士自身既に次のやうな二論文を出された。
Iru and Maru in the Secret History of the Mongols,
HJAS, 17 (1954), 403—410.

'On the titles given in Juvaini to certain Mongolian
princes,' HJAS, 19 (1956), 146—154.

(4) 「モンゴロイニー」の研究に就いては Storey, *Persian Literature*, (I, 260—66, 1272) 參照。

(5) ノルトリアの劃期的な名作「モンゴル侵入時代のトルキスタン」は一九〇〇年露文で發表され、一九二八年英譯をられた。昨年モノルスキー教授による改訂版が出た。

更にジュヴァイニーとラシード・ウッティーンとを比較し、アランのメケス城攻略を論じた精緻な論文に次のものがある。
V. Minorsky, 'The Alān capital* Magas and the Mongol campaigns,' BSOAS, XIV (1952), 221—38.

(9) *The Tārīkh-i-Jahān-Gushā of 'Alā'u d-Dīn 'Aḥā Maik-i-Juwaynī*, Part I—III, ed. by Mirzā Muḥammad, 'E. J. W. Gibb Memorial', Vol. XVI, Leyden & London, 1912—37.

(一九五九・九・六)
(北海道大學助教授)

(7) A. J. Arberry, *Classical Persian literature*, London, 1958 (151—52) 參照。

(8) ノルシア語史料中のモンゴル語「トル」語に就いての最近の論考を若干擧げておきたい。

(i) V. Minorsky, *Pūr-i-Bahā's 'Mongol' ode*, BSOAS, XVIII(1956), 261—278.

(ii) Yād-Dāshṭā-yi Qazvīnī, 2 vols., Tehran, 1332—33.
(iii) 註文(71) 第二卷(259—308)。

(iv) T. Gandjei, 'Über die türkischen und mongolischen Elemente in der persischen Dichtung der Ilchan-Zeit,' *Ural-Altäische Jahrbücher*, XXX (1958),

東洋文庫叢刊 第十五

林春勝・林信篤編「華夷變態」

石原道博

このたび、ながらく懸案であつた「華夷變態」の刊行が、文部省民間學術研究團體補助金により、東洋文庫から文庫叢刊第十五(昭和三十三年三月)として、A5判、上中下三冊、